

国立研究所から大学に移って

藤 森 淳（物理学教室）

筑波での職住接近に恵まれた環境から一転して、片道2時間の遠距離通勤を始めてもう4カ月余りになる。まだ講義は受け持っておらず、新しい環境を充分体験してはいないが、10年余りの国立研究所の生活に慣れてきた身には、いろいろ戸惑うことも多かった。

既に多くの方が広報で述べておられる様に、建物や研究設備が老朽化していること、研究費が少ないことが着任の第一印象だった。私が10年前に修士課程を終えてすぐ筑波の無機材質研究所に就職したのも、このような研究環境があまり魅力的に感じられなかったのが動機のひとつであった。そして現在、(高額な装置は科研費などの他の財源に頼るとしても) 経常的な研究を現状の規模の校費でやって行けるのか、不安に感じている。

しかし、大学には研究所にはない独特の自由な雰囲気があるのは確かだった。(文部省以外の行政官庁所轄の) 国立研究所はいろいろな面で事務的な手続きが煩雑で、例えば、試薬一瓶・ネジ一本

に至るまで会計課の用度・契約係を通して文書で注文しなければ購入できなかったし、(ついこの間までは) 旅費の不足で出張許可がおりない場合には有給休暇をとって学会等に行く必要があった。研究においても、大学では各研究室が独立性・独自性を保持しており、行政に惑わされることもないようである。

と言っても、国立研究所には大学と異なった意味での自由があり、むしろ、大学と研究所は異なった役割を持つために、機能的・組織的にも異なっていると言った方が正確だろう。研究所では(少なくとも私のいた無機材研では)、ヒラの研究員から部長クラスの研究者まで、研究テーマの選択から予算額に至るまで基本的には機会がかなり平等に与えられていたと言っている。大学に匹敵するアカデミックな雰囲気はないが、大学における講座制のような強固な上下関係はなく、比較的恵まれた研究費・大学よりも強い横のつながりなど、若い研究者にはよい環境であったと思う。

以上のような研究体制・環境の違いが研究所に有利に表れたのが、一昨年発見されセンセーションを起こした高温超伝導体の研究だったと思う。結晶解析や基本的な物性測定装置・専門家のそろった研究所や、大学でも共同研究のバックグラウンドのあったグループは初期の研究で成果を挙げたのに比べ、本教室も含めて主要な大学の物理学教室の対応は遅れがちだったとの印象がある。もちろん、学生は現在進行中のDoctor 論文のテーマを捨てて高温超伝導にとびつくわけには行かなかっただろうし、このような緊急事態に対応できることだけが研究体制の評価につながるわけではないが、固体物理学上の大事件の一つだったことを考えると、参加したくても体制が整わず参加できず残念に感じている研究者も多いと思う。

ところで、若い研究者に自由な研究環境と言うのは、裏を返せば、上に立つ研究者によってはなかなか思いどおりに行かないことも意味する。活発とは言えない国立研究所・大学の間の人の流れが殆ど研究所→大学の一方通行となっているのは、このことが大きな原因の一つであろう。民間の研究所も含めて、もう少し相互に人事交流ができるようになれば、いろいろな意味で双方とも活性化されると思う。実際のところは、研究環境の変化の結果として人事交流が活発化するのかも知れないが。現在、私は実験装置の大学への移管で「省庁の壁」の厚さを身を持って感じている。大学間の移動で、問題なく装置を移管している人たちを見ると、少なくとも、このような制度上の障害はなくしてほしいと思う。